

# 「治療の結果報告、ならびに患者への更なるサポート のための対策提言（アトピー手記）」

昂大（お父様記述） 11 歳

2016 年 1 月 11 日

現在通院中ではあるが治療はほぼ終わりに近づいていると感じており、現時点での松本医院通院の成果と課題を明確化したい。また現在松本医院に通院しながら高度の忍耐を強いられている患者各位へ、松本治療に対する私なりの理解・感じ方を共有化し「松本医院通院を続けていてもいいのだろうか」と皆様がお持ちであろう断続的なご心配に対して共感が得られればと願っている。なお個人情報ではあるが、公平性の観点から妥当と思われるので患者である愚息の簡単なプロフィールも記載する。

## （1）症状

アトピー性皮膚炎、鼻炎。そして松本医院通院後に発症した気管支不調、喘息。

## （2）発症時期

生後すぐ。

## （3）松本医院通院開始時期

生後 1 歳半（2006 年）に通院開始。現時点まで約 10 年間中断することなく通院を継続。

## （4）通院動機

幼少期からのアトピー性皮膚炎で複数の医院に通院していた父親（執筆者）が、西洋医学手法による治療の限界と根本治癒の不可能性を直感し、近所の漢方医である松本医院に 2004 年から通院していた。自己都合と一本化したい父親からの薦めによるもの。

しかし生後当時は松本医院通院の実績が不明であったため、すぐにかかることはせず。その代わりに義姉が通勤している中国人医師による漢方医院の漢方（ホチュウエッキトウ）を定期的に服用していた。

## （5）通院方法

父親がほぼ 2 週間ごとに受診し、自らの受診時に息子の近況を報告し、漢方薬を受け取っていた。松本理論ではアレルギー諸症状は本人の免疫が治すものであり、体の構造を変化させるというプロセスの間は、アレルギー症状という嵐が去るのを待たなくてはいけない。その

意味において治療に時間を要することを理解し、毎回本人が直接医師に面会することは不要と判断していた。

余談ではあるが、治療するのは免疫寛容という状態を体内に作ることであり、免疫寛容がアレルギーの諸症状から体を防いでいるのである。つまり本質的には「免疫が治す」という表現は間違っていると考えている。

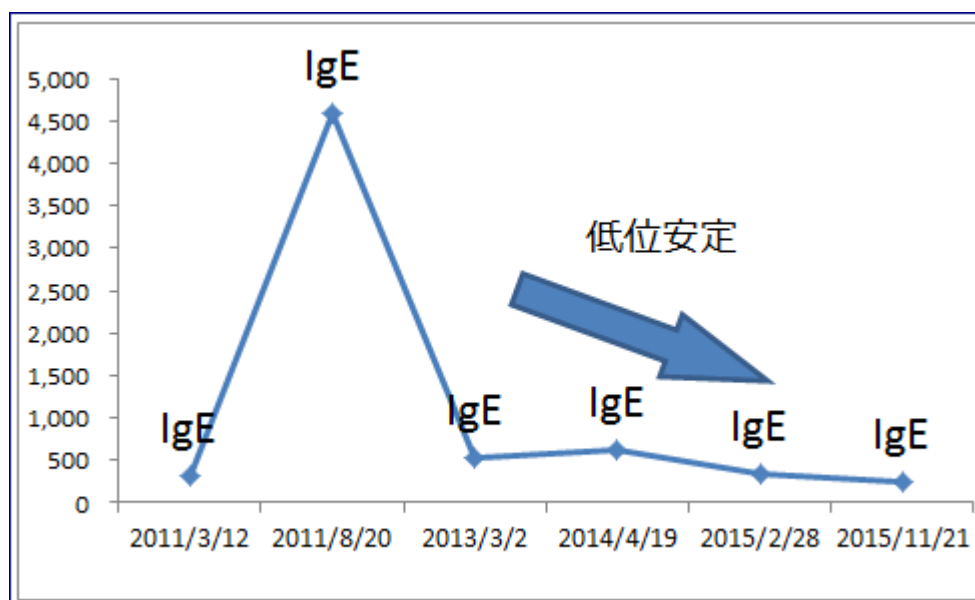
もちろん要求があれば息子を面会させていたが、それで症状が改善するわけではないので特に意味は感じていなかった。その代わり血液検査の実施機会とわりきっていた。

#### (6) 血液検査結果

血液検査は全部で6回。見た目の症状では2011年8月（6歳）がもっともひどかった。

##### グラフ (a) 非特異的 I g E 結果

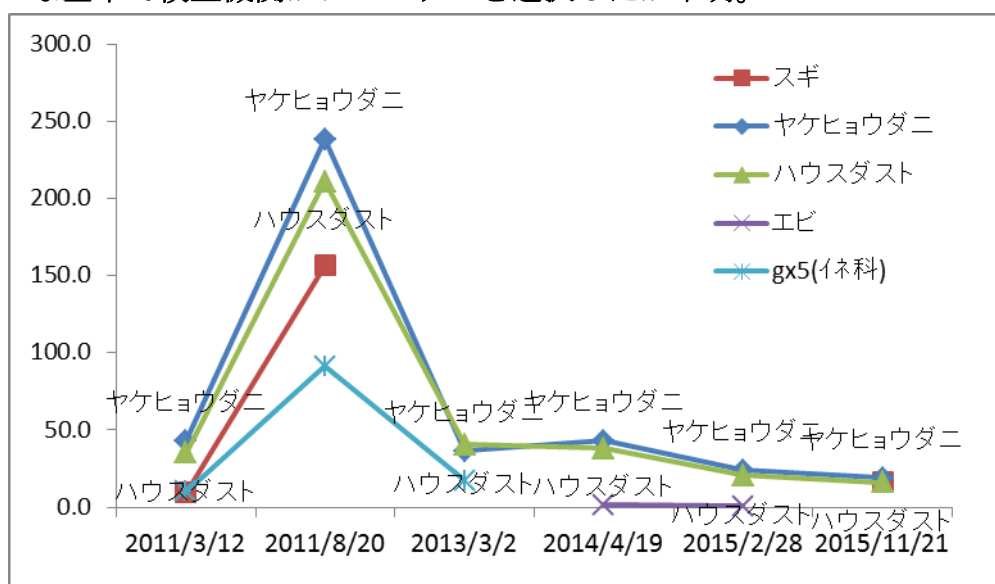
- ・症状で見た目もピークであった2011年8月度を脱してからは低位安定状態となっており、免疫寛容状態になっていることが読み取れる。
- ・ただし2015年の正月に帰省中喘息を発症して、夜間に地元の医院に緊急搬送したが、それが血液検査には表されていない。それ以前も同じ病状が一度あった。



##### グラフ (b) シングルアレルゲンの結果

- ・グラフ (a) の非特異的 I g E の結果と同じような形状になっている。上述同様に喘息症状は表されていない。
- ・血液検査全6回を通じて結果が得られた共有のアレルゲンは、ヤケヒョウダニとハウスダストのみ。患者側からアレルゲンの特定を要求し

たことは1度だけあったが、これでは定点観測ができない。どのような基準で検査機関がアレルゲンを選択したか不明。



## (7) 成果

前項の血液検査の結果の通り、抗体を表す I g E の数字も低位安定しており、免疫寛容の状態になっている可能性（松本医師談）に同意する。なお外見的な症状の認識という肌感覚とほぼ一致している。ただし、2015年正月に発症した喘息はなぜかこの結果に表されていない。

## (8) 課題と対策

これまでに発見した課題は多いが、特にここで挙げたい点は次の2つである。1つ目は医学的専門知識を有しない私には課題に対する対策を考えられないが、論点を整理した上で松本医院に対する依頼という形に昇華させている。2つめはおこがましくも、一般企業に勤める小職が対策を提案させていただく。

### ① アレルギー症状緩和方法の限界

松本治療では患者は、免疫組織が抗原に対して寛容状態になるまでアレルギー症状という「嵐」が去るのを待たなくてはならない。その嵐の間、患者を支えてくれるものは①自分の信念②家族の支援だけである。対策として漢方風呂や塗り薬が念仏のように繰り返されているが、その対策だけでは嵐には大して効果がなく、ほとんどの患者がそのジレンマに苦しんでいるのではなかろうか。

特にステロイド治療が発達し、苦しい症状から容易に開放される現代においては、患者は極度の孤独感を強いられる。気晴らしにネット検索してみても、松本医院に批判的な表現が目につき不安感は増長す

るばかりである。松本医院が患者に「ステロイドを使わない」と宣言し、それが患者にとって幸福であると世に示すのであれば、「嵐」を緩和するための新たな対策を講じることが患者の気持ちをサポートし、ならびに松本理論や医院の経営を安定化させるものであると考える。ぜひ**新たなアレルギー症状緩和方法を提案していただきたい**。

なお、患者をサポートする策③として、電話による松本医師への相談が現行実施されているが、話を聞いてもらうことによって嵐が収まるわけではないので、私はついぞ電話はしていない。ゆえに③は手法としてカウントしていない。

## ②待ち時間の長さ

私がよく受診する土日は遠方からの患者もあって、待合室に自分が座る場所もないほど混みあう。電話による診察も平行して実施されているので、診察の進行状況も悪い。ようやく自分の診察の順番が回ってきてても、受診中に電話がひっきりなしなので、診察室に座ってもなおも待たされることになる。また電話と直接診察の両方で忙殺されている松本医師は血の気が上っているので、患者が自分に与えられたごくわずかな短い時間で医師との会話を生産的なものにするには非常に高度なテクニックな要求される。わずかばかりの医師からの指導といつもどおりの漢方薬という小さい成果を得るだけであるが、松本医院診察への往復時間を合わせて近くに住む私でも半日ほどの時間を割かなければいけない。一般企業に勤める私の目からは信じられないほどのムリムダモレが毎回生じているのが現状である。

患者のタイムマネジメント、医院の業務としてのクオリティの向上、医院と患者との関係改善、そして松本理論で救える患者の一層の拡大と松本医院の経営の安定化対策として、**受診に訪れた患者に対する診察と電話診察の分離を提案したい**。これまでのクオリティを下げずに受診内容の特化と棲み分けを実施するだけである。たとえば奇数週の月、水、金、日の午前中は電話のみ、そして午後は直接受診のみと患者層を集中させる。不公平が生じないように、偶数週は逆にする。電話してくる患者は電話の待ち時間はあるものの、通話がつながった後でも待たされる（＝先生が直接受診に要する）時間を削減することができる。一方直接受診の患者は、待合室においても診察室に入ってからにおいても松本医師が電話対応で取られる時間を削減できる。医院の業務もそれぞれに集中した体制を敷くことができ、効率化が図られるのではなからうか。ぜひご検討いただきたい。

## (9) 最後に

現在おかげさまで免疫寛容とうかがえる状態に達し、血液検査結果も低位安定となっている。松本治療は感覚的に終盤局面に差し掛かっ

ていると思われるが、何を以って治療完了とするのかが不明である。  
医師からの終了宣言の基準を教えてください。

以上

	H23/3/12	H23/8/20	H25/3/2	H26/4/19	H27/2/28	H27/11/21
非特異的 IgE	307	4590	539	629	347	242
ダニ	43.3	238.5	36.4	43.3	23.9	19.0
ハウスダスト	35.4	211.0	40.5	38.3	20.5	16.2
LDH	265	289	246	229	213	224
リンパ球	28.1	24.9	34.0	33.0	34.0	32
TARC					1012	477